

## **BACK IN THE SADDLE**

バック・イン・ザ・サドル

Words and Music by S. Tyler/J. Perry

エアロスミスの第4弾『ロックス』は、彼らのアルバムの中でも評価Na1とされている作品である。「バック・イン・ザ・サドル」は、その『ロックス』のA面トップに配されている曲だが、エアロスミス・ファンならずとも、1度は耳にしたことのあるナンバーではなかろうか。

それまでのアルバムとこの『ロックス』との大きな違いは、後者の方がより複雑なアレンジで構成され、多種類の音色でプレイされているという点にある。また、このアルバムが倉庫内で録音されていることも特筆モノ。

歌裏にあたる©のバッキング・ギターは、合理的なフィンガリングを要する部分である。ド頭の6弦3フレットは中指。続く5弦の3・4フレットは、中指・薬指。2拍目裏の和音は人差指1本のバレー・スタイルで押弦し、2弦2フレットまでを捕えてお

く。ピッキングはEとA音だけであるが、2弦2フレットのC<sup>\*</sup>音を出しても全く問題ないので、あまり神経質になる必要はない。このフォームから中指と薬指でコード D(4拍目裏)を作り、2小節目2拍の4弦5フレットは小指、6弦3フレットは人差指で押さえ、3フレット・ボジションのコードGを作ってしまう。従って、5弦5フレットは薬指。次に動く4弦4フレットは中指で処理し、コードCはこのフォームをずらす要領で対処すること。

また、この曲ではしばしばアームによって、音に変化が加えられている。たとえば、[2]の頭2小節間のプレイが代表的な使われ方だが、これは1度ピッキングしたら後はノン・ピッキングでニュアンスを変えていく奏法である。つまり、アームを押し下げ、バネのカでリターンさせるわけだ。1音ぐらいの音程差をつけることがコツ。







































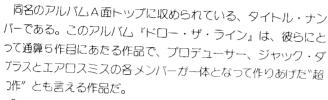




## DRAW THE LINE

ドロー・ザ・ライン

Words and Music by S. Tyler/J. Perry



「ドロー・ザ・ライン」でまず注目してほしいパートは、スライド・ギター。これは、いわゆるボトル・ネックを使った奏法で、その独特なサウンドは魅力的である。通常、ボトル・ネックは薬指にはめ、人差指と中指は他の作業のために生かしておく。スライド・ギターは、ボトル・ネックを弦上ですべらせてプレイする

わけであるから、当然ノイズの発生しやすいテクニックだ。ノイズ防止のためには、ボトルを使用している間、常に人差指と中指を弦上に軽くおいて、全ての弦をミュート状態にすること。こうすれば、必要な音だけが響くからだ。

また、このスライド・ギターは、ノーマル・チューニングではなく、オープンA・チューニングになっている。このチューニングは、6弦から順に E・A・E・A・C・F・E とし、何も押さえない開放音を全て鳴らすとそのままコードAになるチューニングである。



© 1977 by Daksel Music Corp. The rights for Japan assigned to CBS/SONY SONGS

81











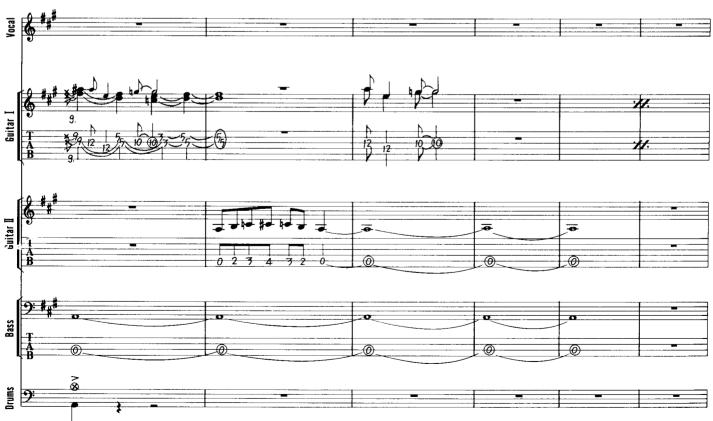


























Words and Music by S. Tyler

このバラード・ナンバーは、彼らのファースト・アルバム『野獣生誕』に収められている秀作で、シングル・カットされてから約3年の月日を経てヒット曲に名を連らねたいわく付きの曲である。インストルメンタル・パートは、ギター2本、キーボード、ベース、ドラムス、とシンプルな構成になっており、アレンジ自体メロディー・ラインを生かすように最低限必要な音数ででき上っている点に特徴がある。

イントロダクションにあたるリハーサル・マーク国は、ギターとエレピで始まり、その後ろに流れる白玉のキーボードはメロトロンのストリングス・サウンドである。メロトロンとは、テープを使用したサンプリング式キーボードで、当時多くのミュージシ

ヤンに愛用された名器である。また、イントロの最後に出てくるギター・フレーズは、プリング、ハンマリング、スライドを多用するラインなので、個々のテクニックは確実にこなしていく必要がある。音使いは、ハーモニック・マイナー・スケールによるもので、この曲のキーFmにおけるスケール上の第7音(E<sup>b</sup>音)が、ナチュラルになっていることがポイント。ただし、イントロ最後の1小節は、ナチュラル・マイナー・スケールになっているので、運指の際にはポジションに要注意。ベース・ラインは、それほど難しいテクニックを必要とする作りではないが、体符を大事にしてプレイすることがこの曲のポイントである。





















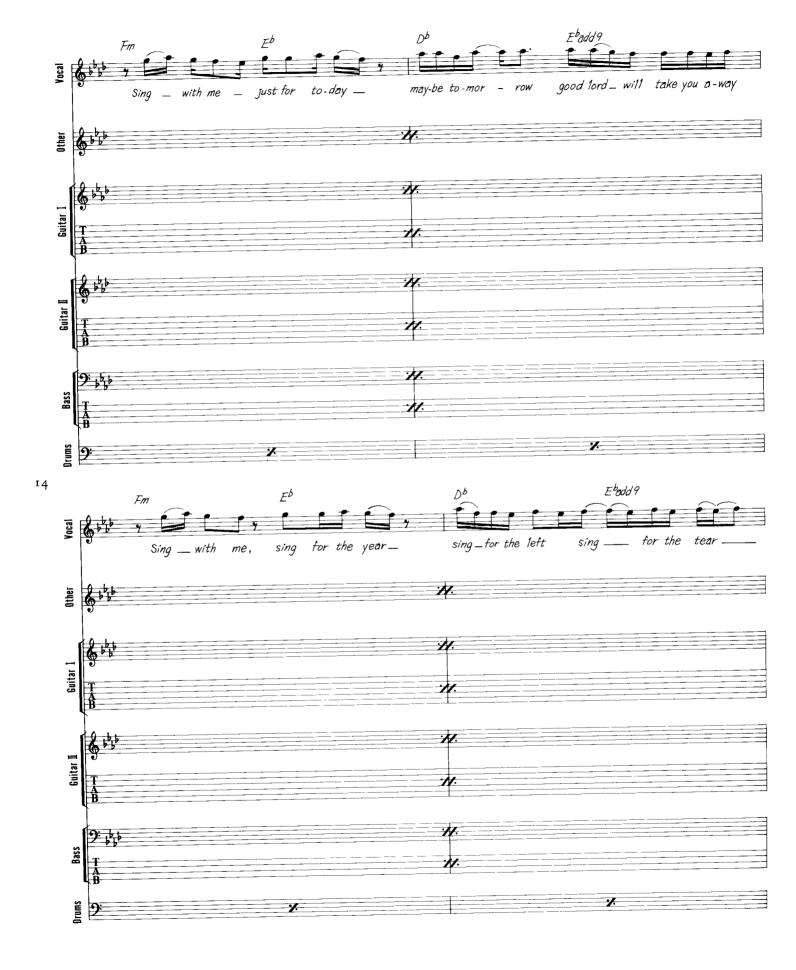
















## KINGS AND QUEENS

キングス・アンド・クイーンズ

Words and Music by T. Hamilton/J. Kramer/S. Tyler/B. Whitford/J. Douglas

エアロスミスが、トータル・サウンド面で頂点に達したとも言える、アルバム『ドロー・ザ・ライン』に収められている曲である。同じ曲が、違う構成でベスト・アルバムに入っているが、ここでは『ドロー・ザ・ライン』のテイクを取り上げた。

「キングス・アンド・クイーンズ」は、エアロスミスとしては異色なタイプのナンバーで、プログレッシヴ・サウンドの香りが強い凝った作品だ。ギターのサウンド・メイキングは、比較的マイルドなディストーション処理がなされているが、あまり低域を強調し過ぎると音が前面に出てこないので要注意。旧の4小節目にあるギターは、ヴォリューム奏法。これはギターのヴォリュームを絞った状態でピッキングし、しだいに音量を上げていくテクニ

ックだ。ヴォリューム・ペダルを使用する方法もいいだろう。© のダブル・チョーキング(W.C)は、一方の弦を固定し、他方をチョーキングすることで、両者をユニゾンにする奏法だが、音程をぴったりと合わせることが重要。 [D]にある D\*メジャー・セヴン人の分散和音は、ミュートぎみに弾いて、1音1音が明確に聞こえるようにすること。 [E]のギター・ソロは、後ノリに近い感じでゆったりと弾く気持ちが大切である。ソロ頭4小節目にある半音チョーキングは音程に注意。若干、低めの音程でプレイした方がぴったりとくるハズ。リピート後の4小節目3拍のグリスは低音弦に左手を乗せてピッキングし、ロー・ポジションからハイ・ボジションに向けて指をすべらせる奏法だ。















































## MILK COW BLUES

ミルク・カウ・ブルース

Words and Music by KAKOMO ARNOLD

『ドロー・ザ・ライン』のラストに収められている"シャッフル・ナンバー"である。

譜面の最初に示してあるように、8分音符2つの各1拍は、終始はねたリズム、シャッフルで演奏しなければならない。シャッフルと一言でいってしまうと簡単に聞こえてしまうこのリズムも、実際に1曲を通して演奏するとなると、これが意外と大変。テンポ・キーブやリズムの走りには充分注意が必要である。

ギターの音色は、ディストーションガかかっているが控え目にすることが肝心。もう少しサスティンが欲しいな、と思ってもそこは抑えてがまんすること。ビッキングの強弱で、充分サスティンをコントロールできるはずだ。

イントロAの3弦3フレットは、クォーター・チョーキングを

するわけだが、これは別名ブルース・チョーキングとも呼ばれ、音程を4分の1だけ上げるチョーキング・テクニックである。ここでのラインは、マイナーのペンタトニックが使用されていて、このポジションにおけるクォーター・チョーキングのポイントとなるのが3弦3フレットだ。ほとんどのギダリストは、指ぐせとしてクォーター・チョーキングしているが、半音チョーキングを途中で止める要領でフレイすれば0K。また、運指が人差指となるので、チョーキング・フォームの基本を守ってプレイレよう。

また、ミュート奏法(M)がかなり使用されている。この曲のブレイで聞けるように、ミュートにも様々な加減のモノがある。軽くミュートしたり、強くミュートしたりしてそのニュアンスが微妙に変えられているわけだ。









































## **SWEET EMOTION**

やりたい気持

Words and Music by S. Tyler/T. Hamilton

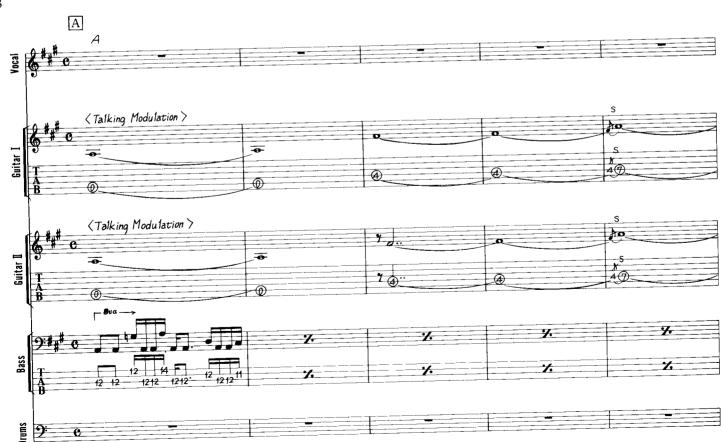
これは、「闇夜のヘビィ・ロック」から選び出したエアロスミスの 代表曲である。ライブ録音もリリースされているが、ここではス タジオ・ヴァージョン。

サウンドで特に目立つ点は、トーキング・モジュレーターを使用したギターだが、これはジェフ・ベックの弾く「迷信」で一躍有名になったエフェクターだ。最近では、リッチー・サンボラ(ボン・ジョヴィ)が「リヴィン・オン・ア・ブレーヤー」で使用しているが、あまり登場してこないエフェクターのひとつと言える。構造は簡単で、ユニットに収められたスピーカーから音を出し、この音を伝えたチューブを口にくわえて、この先の開閉を調整することでモジュレーションを掛けるわけだ。

リハーサル・マークにのバッキング・ギターは、2小節目が基

本のパターン。2~3弦の2フレットは人差指1本を使うバレー・スタイルで押弦し、コードAのサス・フォーにあたる2弦3フレットのD音は中指で捕える。C音→A音のプリングは、指先を引掛けて下にはずす要領が肝心。この部分のベースは、クロマチックに移動する6弦のスライドがポイント。特に、6弦の3→4→5フレットと移動するラインは、指先が浮かないようにしつかりと弦を捕らえ、ネックはあまり強く握らないことがコッである。

また、この曲ではドラマーのジョーイ・クレーマーガハイハットのオープンとクローズを多用している点が特徴的。クローズする時のタイミングには細心の注意が必要であるが、回の様にシンコペーションさせる部分は特に強調するドラミングが要求される。











Asus4 A

7.

7.

far \_

You

You



Asus4

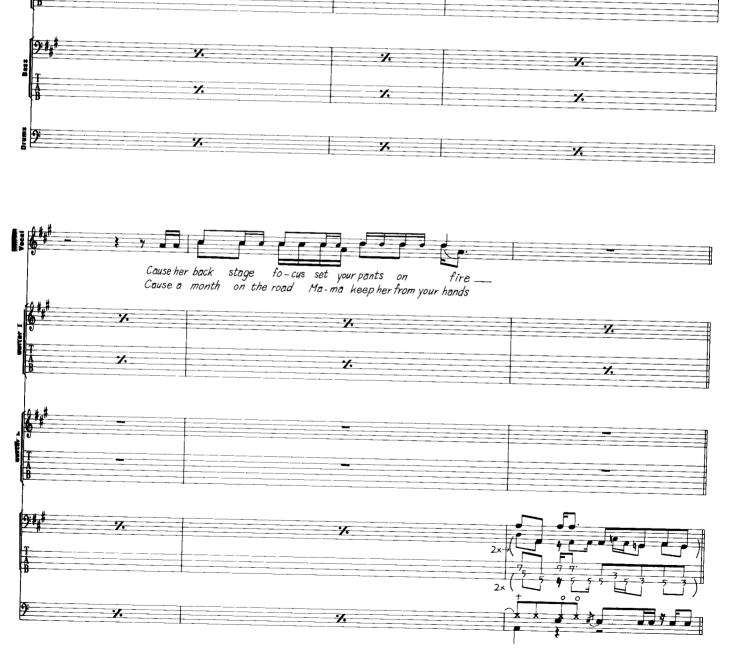
Wear-in' out things and no - bod - y wears You dad-dy said it took me just a lit-tle too far

γ.

7,







Asus4 A

7.

1.

Asus4 A

Well I got good news, she's the re al good li-ar I'll take a-bout some thin' you can sure un-der-stand

7.

7.

Asus4 A

get-up-and-go-must have got up and went \_\_\_ take you back stage You can drink from my glass \_\_\_

7.

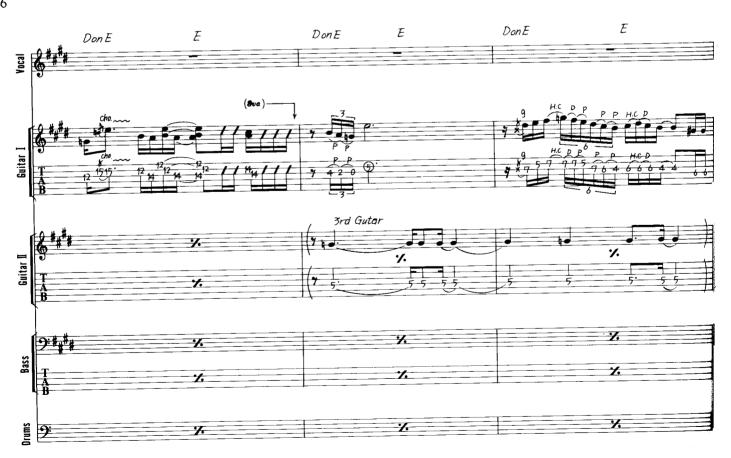
%















DonE

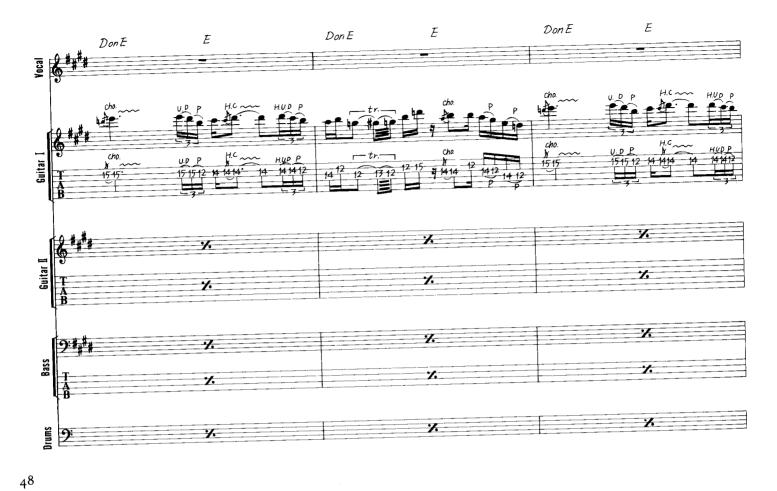
Ε

DonE

E

Don E

Ε





## TOYS IN THE ATTIC

間夜のヘヴィ・ロック

Words and Music by S. Tyler/J. Perry

アルバム 『闇夜のヘビィ・ロック』のA面トップを飾る8ビート・ナンバーである。

イントロAIのリフは、サビのEIと全く同じパターンで、この曲のメイン・リフとなっている。上段のファースト・ギターは、ベースとオクターブ違いのユニゾン・プレイ。3小節続くシングル・ノートのラインは、オルタネイト・ピッキングがベスト。このピッキングは、ダウンとアッブを規則正しく交互に繰り返すテクニックで、テンポ・キープや速弾きにはなくてはならない奏法のひとつである。下段のセカンド・ギターは、ブラッシング(×印)とコードを組み合わせたバッキング・パターンとなって、歯切れ良くピッキングしていくことが第1のポイントである。なお、ブラッシングとは、左手の指を複数使用して弦上にはわせて(とい

うことは強く押え込まないで)全ての弦をミュート状態にし、その状態からピッキングするテクニックだ。これは、一種のノイズ奏法だが、使い所さえ間違えなければ効果絶大。実際の音を良く聞いて、そのフィーリングをしつかりと摑んでおこう。リハーサル・マーク[ごのセカンド・ギターは、1小節目2拍のチョーキングが要注意。2弦9フレットは半音(1フレット分の音程)、3弦9フレットは1音(2フレット分)のチョーキングである。手首の回転をうまく利用して、無理のないチョーキングをしよう。ここは、2本の弦を人差指1本で押さえるジョイントを使用する部分だが、1拍目の2弦10フレット→9フレットとブリングする時にはすでに3弦9フレットも押えておくフォームが肝心。



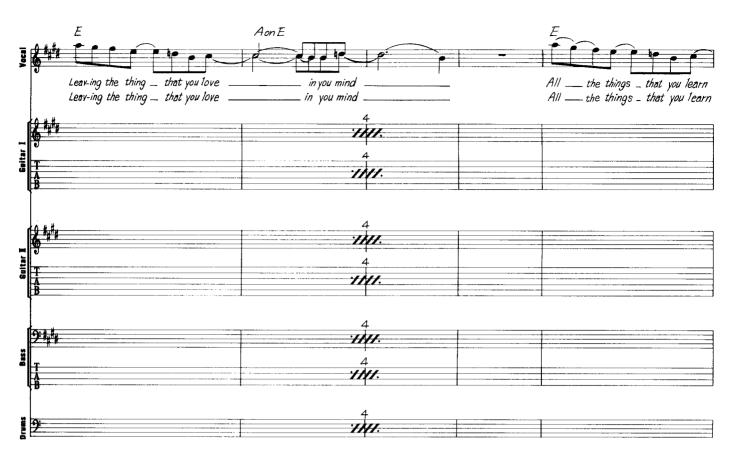
16























G







Repeat & Fade Out





## THE TRAIN KEPT A ROLLIN'

ブギウギ列車夜行便

Words and Music by T. Bradshaw, L. Mann & H. Kay

ロック史上に残る "名演"、といっても決して過言ではない1曲である。オリジナルはヤードバーズだが、エアロスミスは彼ら以上にロック・スピリットを感じさせる演奏を繰り広げている。ここに載せた譜面は、75年に発表された2ndアルバム(日本におけるデビュー作)『飛べ/エアロスミス』に収録されているテイクだが、前半がスタジオ録音で「同からの後半のライブ構成が効果満点。この曲の核になっているリフは2種類だが、まずはこれらをクリアすることが先決。1つ目は、リハーサル・マーク「②」の6小節間で、2つ目は後半国の12小節間である。この2パターンをマスターすればバッキングの大半を押えたと考えていい。その他は若干の違いこそあれ、基本はこの2種類のパターンででき上ってい

るわけだ。

ソロ・ギターは、いわゆるマイナーのペンタトニックを使った音使いがポイント。ポジションは開放をからめたロー・ポジションと、これをオクターブ上げた12フレット付近のハイ・ポジションが主体となっていることに注目。また、チョーキングの音程が半音、1音、1音半、2音というように、ヴァリエーションに富んだフレージングになっているので、音程には充分な注意が必要である。そのためには、チョーキングの基本をもう1度見直すことが大切。つまり、指の力で弦を押し上げるのではなく、手首の回転を利用するチョーキング・フォームだ。



93















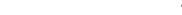








Eg &###











1.2.3.

G N.C. 4 times Repeat 4.













D.S. 2. to H





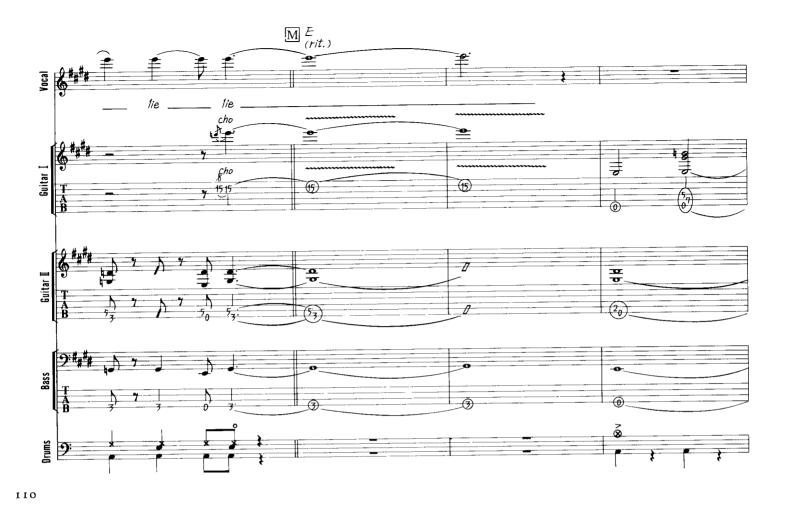
















E



(Free tempo)

Ε



## WALK THIS WAY

お説教

Words and Music by S. Tyler/J. Perry

エアロスミスの人気復活は、このナンバーをカバー・ヴァージョンとして大ヒットさせた RUN D.M.C. に負う所が少なからずある訳だが、やはりオリジナルであるエアロの演奏は、味わい深いモノがある。ライブ盤に収められたテイクも捨て難いが、ここでは彼らのサード・アルバム『闇夜のヘビィ・ロック』から、スタジオ・テイクを取り上げてみた。

イントロAIのギター・リフは、16分音符のピッキングを行ないながらも、ドラムスが叩き出す8ビートの感じを出すことが最大の課題。ジョー・ペリーの弾き出す音をなぞることは、練習さえすれば誰でもできることだが、こういったビート感やタイミング、ピッキングの強弱などを再現することはほとんど不可能に近い。つまり、これらの要素がジョー・ペリーの個性になっているわけ

だ。実際の音を良く聞き込んで、何度も挑戦してみる気持ちが大 切。

|B|のバッキング・ギターは、右手を使ったミュート奏法。これは、右手の横腹をブリッジ上に乗せてピッキングしていくテクニックだが、ミュートをしっかりと行なわないと締りのないプレイになってしまうので要注意。6弦8フレットの〇音には小指を使い、3拍目の5フレットは人差指1本でジョイントさせる局面である。なお、ここは16分音符をシャッフルさせている所だ。

ドラムスの奏法的ポイントは2つ。1つは、オープン・ハイハットからクローズさせるタイミングを正確に出すということ。そしてもう1つは、16分音符のキックをしつかりと出して、しかも全体のつぶをそろえる、ということだ。



26

















